

「これから、朝の会を始めます」

いつもと変わらず始まる朝の会。いつもと変わらず遅刻寸前で教室に駆け込む、ランドセルを背負った自分。何一つ変わらない、いつもの朝でした。

しかし、担任が告げた朝の二言目は、いつもと違うものでした。

「Aくんはご家庭の事情により、転校することになりました」そう告げた途端、いつもと同じだったクラスの空気が重苦しいものへと一変したのです。この空気に私は、息をも詰まる思いを感じました。

彼はここ数か月の間ほとんど学校に来ない、いわゆる不登校児でした。そして、彼は家が近所で仲が良い友人でありました。だからこそ、毎朝通る友人の家は、何もできなかった無力感と悲しみと後悔を、ただ、ただ、思い出させるのでした。

そして、時は流れ、中学生の時。私は不登校になりかけました。

私は周りとは足並みを揃えた行動ができず、少々浮いた存在だったのです。そして、担任には「どうしてみんなと同じようなことができないの？」と日々、言われ続けていました。私は、人に合わせなければならない理由が分からず常に悩みつづけ、次第に登校の拒絶を始めたのです。しかし、私は、周りとの不和を受け流せる、無神経な性格を持ち合わせていたために、登校復帰することができました。ですが、友人はどうでしょう？彼はただ、神経質な性格であったために、不登校に陥ってしまったのです。

この問題は私の友人に留まる話ではありません。性格は人によって十人十色、違ったものです。そしてそれは生まれや環境に影響され、偶然持ちあわせたものなのでしょう。彼は偶然、周りになじめない性格を持っていました。この偶然のため、人に馴染めなかったのです。

子どもは、学校で多くの他者と関わり合います。その交流の中で自分を知ります。そこで初めて、自分のやりたいことがわかります。

これができない状態を想像してみてください。見知らぬ土地で行く先もなく、頼れる人もおらず、闇雲に放浪しているに等しいといえるでしょう。

教育とは、このような放浪している人々を支えるものではないでしょうか。どのような性格でも、個性として尊重し、育む。これこそが、学校が、家庭がすべき教育なのではないでしょうか。子どもが社会で生きていくために、教育が彼らを包容しなければならないのです。だからこそ、本弁論において、「適応が困難な子どもを包容する教育」を訴えるのであります！

そもそも、適応ができる子どもとは何でしょうか？

それは、「みんなと同じようなことが自分もできる

「みんなの言っていることがわかり、自分のいったことが理解される」といった円滑な人間関係が作れる子どもを指します。これらが困難となった子どもは、不登校に陥ってしまうのです。2014年の文科省の調査によると、「人間関係の不安を理由にする不登校児は15万人も存在します。これは、不登校児の8割以上を占めるのです。その上、いじめという不登校に繋がる問題も、すべて劣悪な人間関係によって生じます。

人間関係を円滑にするためには、他者の考えを理解し、自分の意見を伝えるといった、社会生活における最低限のコミュニケーションが必要です。円滑な人間関係を作れない不登校児は、自分のやりたいことがわからないのです。

調査によると、不登校経験者の高校中退率は4割と、子どもの全体平均と比べ、なんと2倍以上に及びます。また、「今、何かやりたいことが全くない」と考える子どもは7割と、子どもの全体平均の3倍を上回ります。不登校経験者はこうした苦悩を、生涯に渡って背負わされるのです。

驚くべきことに、彼らの無職率は4割以上と、全体平均の3倍にも及ぶのです。彼らの行き着く先はわかりません。そこは、果てしない荒野とも、くらやみともいえるでしょう。

それでは何故、人と関われない子どもは不登校になり、抜けだせないのでしょうか。その原因は2点あります。まず、学校における不登校未然防止策の不十分性。次に、不登校児に学校復帰を強いることが挙げられます。

現行の不登校未然防止策は、あまりに、ずさんな制度といえるのです。

不登校に関して、「子どもの異変に気づいていたが、対応の仕方がわからなかった

と答えた教師は8割にも上ります。これは、不登校防止の指針が存在しないためです。また、家庭においては、「異変が分からない」といった意見が多くを占めています。

これは、子どもの学校での様子は学校にいる大人だけしかわからないからです。

もちろん、不登校になる子どもは、学校生活の中で、友人集団から孤立しているといった臨床心理学的には対応できるサインを出しています。そして、その際に対応するスクールカウンセラーは、不登校になる子どものほとんどが利用しません。なぜなら、子どもが自発的又は教師のすすめによってのみ、接することができるからです。不登校児の7割以上は、カウンセラーを利用しません。「人と同じようにできない」ことを悩む子どもたちが、他の子どもが利用しない

カウンセラーを利用しようと思うわけがないのです。

次に、挙げられるのは不登校児に対し、学校復帰を強いることです。子どもが不登校になった場合、家庭は解決策がわからなくなるのです。この様な、家庭が何もできなくなるケースは不登校全体の7割にも及ぶのです。そうした家庭は、学校の方針として定められている、教育委員会設置の教育支援センターを利用します。

しかし、教育支援センターは、学校復帰を前提にした対応しかできません。これは、文科省の規定であるため、学校復帰した際、学力が劣らないことを目標とした対応に重点を置かざるを得ないからです。ここに一定期間通い、やがて学校に戻ります。しかし、それもほんの一時的です。周囲に馴染めない子どもが学校に復帰しても、再び不登校に戻ってしまいます。その結果、支援センターを利用した子どもの7割以上は、不登校のままでいるのです。

別の選択肢として、不登校児が他人と関わることを可能にするため、フリースクールといった、NPOなどが立ち上げている施設があります。ところが、まずフリースクールを知らない、または経済的な負担が大きい、あるいは存在しないために普及しておりません。

そこで、これらの問題を解決するため、適応できない子どもの不登校を防ぐための政策、不登校児が人と関われるようにするための政策を一つずつ、提唱致します。

まず、適応できない子どもの不登校を防ぐため、校内において、子どもの学校生活を見守るチームを創設します。ここでは、子どもが出すサインを学校側が察知する指標を設けるのです。この指標は、友人達との接し方、欠席状況を基準としたものです。そして察知した場合、担任など教師がカウンセラー、保護者たちを交えて問題の解決策を相談するといった方針を定めます。

この様に学校と家庭が連携して対応することで、不登校に陥る可能性のある子どもの抱える問題を、各方面からアプローチし、解決できます。この様な政策を先駆的に導入している神奈川県川崎市では、不登校児の総数が政策導入から1年で120人、2年で101人、3年で70人まで減少したように、効果は年々上昇しているのです。

次に、不登校児が人と関われるようにするため、フリースクールを公的な教育機関として設置します。フリースクールは、人間関係に困難を覚えた子どもに対応するために、臨床心理士や社会福祉士などが存在します。彼らが見守るからこそ、同じような困難を抱える子どもたちと円滑な人間関係を構築できるのです。

調査によると、「今、何かやりたいことがある」と答えたフリースクールの子供たちは、4割以上と、子どもの全体平均とほぼ同じなのです。さらに、学習カリキュラムが存在し、非常勤講師が勤務しているため、学力面でも通常の学校と同じ教育が行えることも特徴です。これらの特徴があるからこそ、通常の学校で人と関わるのが困難になった子どもが、再び人と関わる場所として、フリースクールが最もふさわしいのです。

この政策では、文科省が教育機関設置の規定として決めた、「学校復帰の前提」を廃止します。そして、教育支援センターに対し、親を通じてフリースクールの紹介を行うガイドラインを設置します。この政策によってフリースクールは無料になることで、家庭は通常の学校同様に利用できます。更には費用を理由に設置が困難であったNPOも、フリースクールを設置することができるのです。それだけではなく、1つ目の政策による学校と家庭の連携によって、円滑に、フリースクールに通学することが可能となるのです。

みんなと同じことをする必要はありません。ましてや、子どもを見守る私たちが、社会が、強いることなどあってはなりません。子どもを温かく見守り、包容する。それこそが、社会が行うべき教育ではないでしょうか。

ご静聴ありがとうございました。